

2017 多言語対応・ICT化推進セミナー ～東京2020 オリンピック・パラリンピックに向けて～ ICT最新技術展示会

「2017 多言語対応・ICT化推進セミナー」の会場では、講演のほかに多くの団体・企業が、多言語対応の推進に資する最先端のICT機器や技術の展示・デモンストレーションを行いました。

そのいくつかを紹介します。

・ハイブリッドサインシステム

街頭の交通標識や案内地図の製造会社で開発されたサインシステムで、Wi-Fi型とBeacon(ビーコン)型があります。

Wi-Fi型はその看板自体がWi-Fiスポットとなるもので、案内地図や道路名標識の上への設置を想定しています。「Free Wi-Fi」の文字を大きく表示することで、地図を見に立ち寄った利用者が気付きやすいデザイン。東京都台東区で既に採用されており、今後東京23区に順次設置を広めていきたい考えです。

ビーコン型は小形LED照明に内蔵されており、案内地図を照らすと同時に、専用アプリをインストールした端末を持った利用者が近づくと、その案内地図と同じ内容が端末に表示されるので、そこから周辺情報や交通情報のページへリンクさせる、といった活用方法が想定されます。



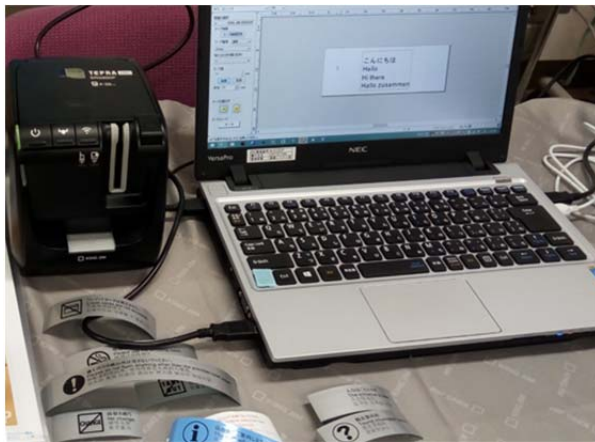
・タブレット表示型翻訳アプリ

聴覚障害者や外国人とのコミュニケーションのために開発されたアプリで、音声入力した内容を多言語に翻訳した上で、タブレット上の指でなぞった場所に文字で表示することができます。曲線での軌跡にも対応しているほか、あらかじめ取り込んだ画像の上に指で線を書くなどもできるので、地図を表示して指でなぞりながら場所を説明したり、記入してもらいたい書類のサンプルを表示しながら記入箇所を示すなどの使い方ができます。



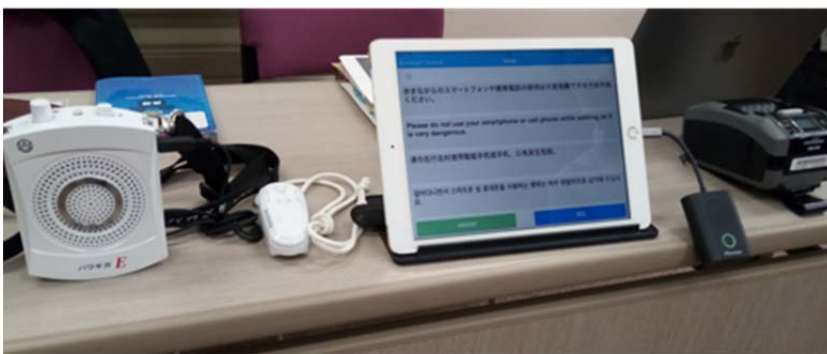
・多言語ラベルプリンター

入力した文字をラベルに印字する小形プリンターを、USBを介してインターネットに繋げることで、Google翻訳での多言語翻訳機能を搭載。パソコンに接続して文を作成・編集するタイプと、専用アプリでスマートフォンやタブレットのみでも作成可能なタイプがあります。文字だけでなくピクトグラムもレイアウト可能で、ラベルの幅も多種あり、ドラッグ&ドロップで文章やピクトを簡単に配置することができます。



・多言語対訳アナウンスサービス

この対訳アプリは、主に駅や施設など定型文での案内が多い場所での利用を想定しています。自動翻訳では正確性が担保できない場合、あらかじめ定型文の翻訳文を登録しておくことができますが、災害時など緊急の場合などには、登録された文章を探すことがタイムラグになるため、マイクに向かって話すことでキーワードを拾い上げ、登録済み文章を検索できる機能がこのアプリの特長です。翻訳内容は合成音声で再生されるので、スピーカーやメガホンに接続して案内放送とすることができます。登録済みのアナウンスであればインターネット接続不要で利用でき、また逆に定型でない会話は、ネットに接続することで音声翻訳システムとして利用することもできます。



「2017 多言語対応・ICT化推進セミナー ～東京2020 オリンピック・パラリンピックに向けて～」
参考資料配布：<http://www.2020games.metro.tokyo.jp/multilingual/references/170704forum.html>

(平成29年度作成)